はぐくみ

家庭教育を考えるシリーズ

鯖江市教育委員会
鯖江市社会教育委員会
丹南愛護センター鯖丹支所
発　行

6号

考えてみましょう、子どものしつけ（その2）
――小学生を中心として――

（惜陰小学校　児童）

子供の姿
――愛護センター補導員の目から――

孤独な淋しさ

丹南青少年愛護センターでは、常任補導員の他に市民の方に委嘱している補導員六八名が、毎日街頭補導に従事をしています。

市内を巡回して気付くことは、公園や神社の遊び場で町内の子供達が喜々として遊ぶ姿が消え、ゲームセンターや量販店でゲームに夢中になっている姿を多く見かけるということです。

ゲームをしている子供に補導員が「そんなにお金を使わないで早くお帰り」と愛の一声をかけると、「帰ってもだれもいないの。ゲームをするのが楽しいの。」と返事が返ってきます。

また、ある子供に「お父さんは」と聞くと「お父さんパチンコ。僕はここでゲームをして待っているの。」と答えが返ってきます。補導員が親を探しあて注意をすると「自分の子供だからあなたには関係がない」といった顔付きをします。

夜十時頃ボーリング場をのぞくと中学生らしいグループによく出会います。そのたびに声をかけますが、「子供が外出していることを親は知っているのだろうか。」とても気になります。

問題行動の陰にあるもの

最近の社会環境や家庭環境は大きく変化をしています。物が豊かになり消費生活の中で、子供は何不自由なく生活をし、お金や物の大切さ、更には、がまんする力を失いつつあります。

また情報化が進み、いろんな情報がテレビや雑誌を媒介として子供達の手に入り、それがあたかも実像かのような錯覚に落ち入りがちです。

家庭も核家族化が進み、女性の高学歴化、地位向上と相挨って共働き家庭が増加しています。また子供の数も少子化傾向にあり、兄妹の数も二人・三人までで地域全体の子供の数も減少しています。これらのことは、供達が成長過程で人間関係が稀薄になり、豊かな人間関係をもつことが苦手な子供が多くなったことと無関係でないように思います。その一方で母と子の関係が密接なものとなり、過保護等の傾向を招き、父親の存在感の低下にもつながることになっています。

問題行動の相談もこのような家庭に多くみられるようです。

告知板

今回は小学生時期のしつけについて書きました。

次回は、思春期の中学生時期のしつけについて考えてみたいと思います。ご意見がございましたらご連絡下さい。（内線三七一）

今、小学校で気になること

こども

一、学校の中ではあいさつができるのだが、地域ではできていない。
一、自分の物はかたづけても、公共物（みんなで使うボール等）の後始末ができない。
一、落とし物・忘れ物が多いなど、物を大切にする心が欠けている。

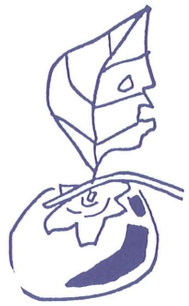
おとな

一、しつけは、がみがみ言うことだと勘違いしている。
一、親自身が道徳的モラル（ゴミのポイすて、交通マナー等）に欠けているのではないか。
一、子どもそれぞれの個性を理解し、「待つ」姿勢を忘れないでほしい。

（市内小学校調べ）

豊かな感性を　あたたかい家庭で

感謝する心　我慢する心も　はぐくもう



我慢のできる子

「駄目な人間をつくるのはそう難かしいことではない。なんでも欲しがるものを与えてやればいい」これはある思想家が言ったことばですが、考えさせられます。

今の時代は、思ったことと結果とがすぐに現れないと承知できない生活感覚が、世の中を支配しています。だから我慢するとか、辛抱するとかという心の強さが失われていってしまったのです。つまり、自分の欲求や感情をおさえる力が弱くなったということで、欲しいものはすぐ欲しい、それがかなわないと腹を立てるか暴れだす、こんな子が増えてきました。いや子どもだけではないかも知れません。

わがままな人間は、弱くてもろいものですし、社会生活になじめず、やがては孤独な人生を歩まねばならないことになってしまうでしょう。

我慢するというのは、心の力を養う上で非常に大切な節目だと思います。

失われた心「感謝」

最近家庭で使われなくなった言葉に「もったいない」というのがあります。使われなくなった心に「感謝」があります。あまりにも物が豊富にあるので、ついもったいないとか感謝という思いがうすれてしまったのでしょう。

昨年は冷夏でお米が不作でした。そのためお米のありがたさを知りました。今年はすごい暑さと雨が降らなかった。このため水不足となりあらためて水のありがたさに気付きました。

とりようによっては、自然が人間の思いあがりに大きな警告を発したのかも知れません。

ものを粗末にしない、感謝の心を持つ、ということは人間にとって非常に大切な感性なのです。豊かな感性を持った子に育てる、そのためにはまず親からですね。子どもはなかなか言うことは聞きませんが、親の心や、していることはちゃんと見ています。

自分の行動に責任を持つ訓練

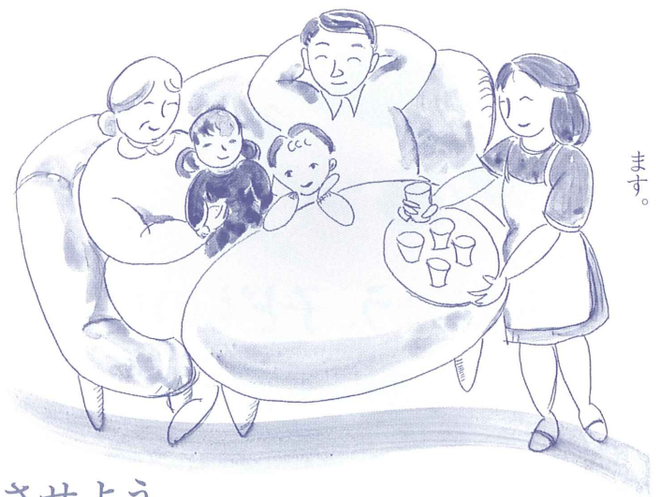
「これを買ってくれたら僕は勉強する」「これを備えてくれたら私は頑張る」「ほんとだね」こんなやりとりで欲しがるものを与えることってよくあります。なにしてくれたらこうする、という取引きで願いをかなえてやるというものです。

ほとんどその約束は守られたことがないと思いますが、でもまた取引きしてしまいます。どこの家でもあることですね。

どこでもあることだから、といって、いつも取引的なしつけを続けていきますと、子は子で何か約束すれば欲しいものが手に入る、とたかをくくります。親は親で、いつもだまされている、とこぼしながら結果的にはまたいうとおりにしてしまって、それがあたり前のような錯覚を起こしてしまいます。

これでは、自分の言ったこと、したことに責任を感じない子に育てるため、親と子が協力しているようなものです。

小さい頃から、自分の言動に責任を持つようしむけていくことが大切だと思います。



家庭は感情の容れ物

いつか大変ショッキングな事件がおきました。子どもが突然両親に傷を負わせたのです。そしてその子が言ったせりふは「この家には僕の居る場所がない―」でした。

部屋もあり器具も揃い、経済的にもかなりゆとりのある家庭でしたが、それでも「居る場所がない」と言い放ったのはどういうわけなのでしょう。

それはきっと、心の安まるふんいきがこの家にはないということを指したのだと思います。

家庭は感情の容れ物だと言います。

お父さんが、会社や職場でおもしろくないことがあったとき、家に帰って母さんやまわりにあたることがあります。理由がわからないため、母さんとけんかになる、それを見て子どもはおろおろして落ち着かない。こんなことってどこの家でもあることでしょう。

家族が、それぞれ内や外で味わう不満や腹立ち、喜びや悲しみ、そうした感情を吐き出すのが家庭。そしてそれを吸収しあい抱えあうのも家庭。こうした感情のうずまく中で一緒に暮さなければならないのが家族です。

そうであれば、心を広く持って、お互いに感情を吸収し抱えあうように努力していくのがまず親の役目ではないでしょうか。

子どもの性格や品性などもこうした家庭のふんいきに大きく影響されるものなのです。

涓滴

ある家の子は、とても素直ないい子でした。ところが、だんだん大きくなるにつれて、学校へも行きしぶり、成績も下りはじめたのです。

その子のお母さんは、常々「子どもをよい子や、できる子にするのは、いつも『お前はよい子だ、できる子だ』と言い聞かせていればいいのよ」と話していました。

ところが、結果は逆の方向に行ってしまったのです。

ほめることと　おだてること

なぜなのでしょう。

それは、お母さんが、ほめることと、おだてることとを取り違えたからなのです。

おだてるというのは、親の都合や期待するイメージをつくりあげるために、行うことです。一方子どもの実際行動のよいところを認め、励ますのが、ほめるということなのです。

だから、おだてるのは、架空の自信をつけることにはならないのです。

おだてられて育った子は、ちょっとした困難をともなう現実にぶつかると、実にもろく崩れてしまうことになるわけです。

ただ、ほめればいい、おだてりゃいい、と簡単に考えては駄目なんです。

しつけも決して例外ではありません。

世界体操競技選手権鯖江大会を成功させよう